

春岡村の伝説

●出戸橋の塚について

東大宮駅へとバスに揺られていると、出戸橋の左手に竹が生えた大きな「塚」が見えてきます。昨年、手前の梨畑がなくなり、見晴らしがよくなって、気付いた方も多いのではないのでしょうか。いったいあれは…古墳？

じつは…

江戸時代、見沼代用水の掘削工事で出た土を盛った「塚」なのです。てっぺんには、大正十三年と記された御嶽講の石碑、中腹には、御嶽神社の木造の祠、麓には、明治時代に村人たちが寄進した手水石があります。塚の大きさは『さいたま市文化財調査報告書さいたま市の塚調査』によれば、径三二・八×三一・六、高さは六メートルです。

さて、時は享保十二年（一七二七）暴れん坊將軍吉宗公の時代。幕府の財政難を解消するため、様々な政策を打ち出した吉宗公ですが、年貢米の増収を図るべく、新田開発に乗り出しました。水田に必要な水を確保し、溜池を干拓して新田にするため、井沢弥惣兵衛によって見沼代用水の工事が始まりました。

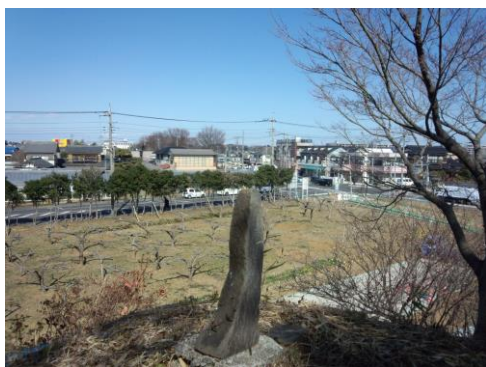
工事を開始してわずか半年で見沼代用水東縁は完成し、享保十三年春、新しくできた田んぼで田植えが行われました。

水路の掘削は、それぞれの村が丁場を区切って分担しました。掘削で出た土は、堤を築いたり、窪地を埋めて平らにしたりするのに利用されました。丸ヶ崎村の丁場では、掘った土が余ったので、出戸橋脇の地主が土地を提供し、その土で「塚」を築いたというわけです。

この工事では土を運んできた村人たちに賃金が渡されませんでした。地主さんの話では、荷車一台につき寛永通宝一枚でした。この家の納屋には、かつて寛永通宝の入った黒光りする木箱があったそうです。大きさは三十センチ角で、上部に手が入る丸い穴が開いていました。ちなみに、片柳村では、銅貨の入った大きな甕のなかに手を突っ込み、銅貨をつかめるだけつかんでよかったそうです。

それにしても、財政難の幕府にとって財源はどこから出たのでしょうか。見沼田んぼの新田開発には、江戸町人の越後屋、野上屋、猿島屋の三人が関わっていて、幕府はこの三人から工事費の融通を受けたと考えられます。

（平山由喜）



※二枚の写真は、旧出戸橋から塚を見上げたものと、塚の頂上から16号方向の眺望です。